

香港日本人学校での勤務を終えて

～特色ある教育活動～

前香港日本人学校小学部香港校 教諭

旭川市立旭川第一小学校 教諭 倉本 格 克

1 はじめに

100万\$の夜景、美食の街など、香港は日本人にとってもポピュラーな観光地となっている。自由貿易港としてまた金融の中心地として発展し、経済活動の中枢を担い世界各国の企業が進出している。中国返還後もなお経済特区として繁栄している。

在留邦人もおよそ25,000人おり、その多くは駐在員である。日本人学校は小学部として香港校・タイポ校の2校、中学部が1校あり、約1,600人の児童生徒が通学している。また、現地校やインターナショナル校も数多く設置され、多くの児童生徒が通学している。どの学校も香港政庁の認可を受けて設立されている。

さて、今回は香港日本人学校の特色ある教育活動を紹介する。はじめに修学旅行について実施前までの「計画」と「その実際」について記述する。次に、日常の教育活動について紹介する。

本校では、3年前から広州修学旅行から上海へと修学旅行の目的地を変更し実施されている。同じ中国国内なのだが、海外旅行と同様の出国手続きが必要であることや危機管理面、自然災害の影響など、日本国内とは異なる事情を伝えられればと思う。



2 修学旅行の実践から

(1) 旅行実施前まで

修学旅行は例年10月下旬に実施されている。この時期に実施するのは、第1に気候が比較的安定していること、第2に教育課程全体のバランス上の理由、最後に2学期編入児童が多いことがあげられる。旅行に万全を期すために、引率者及び旅行請負業者が事前に実地踏査を行っているが、それでも旅行が実施できるかどうか直前まで疑問符が付くことがしばしばあるのが現状である。

①旅行の計画

ア 旅行の目的

修学旅行の目的は、中国にある世界遺産などを訪れ、見聞を広めることと現地校との交流を通して異文化理解を進めるとともに、日頃の英会話学習で培った力の実践の場とすることがあげられる。また、公共の場での振る舞いなど社会性の実践の場とすることもねらいの一つである。

<

イ 航空券の確保

旅行の計画は日系旅行代理店への見積もり依頼から始まる。何よりも香港上海間の航空券を確保することが最も重要である。航空各社により運行時間や料金などに差があり、それらをどう代金に反映させるかが各旅行会社の腕の見せ所となる。最終的な業者選定は卒業対策委員（6年生保護者の代表）と学級担任により行われる。その際、見積もり結果や過去の実績等を勘案して判断する。学校側は安全で少しでも安くと考えるが、これは保護者の考え方と必ずしも一致しないのが実情である。

ウ 旅行細案の検討

主な見学希望地を決め、旅行業者に旅程作成依頼を送る。旅行業者は現地の代理店などとの打ち合わせを行い、安全で無理のないいくつかの計画を作成する。その際、現地での交流校をどこにするか、どのような交流が可能かなどの情報も収集する。その後、旅行業者による説明を受け、実地踏査が実施されることになる。実地踏査は夏休みに引率者と旅行業者の担当員により実施している。実地踏査前には細かな計画を作成し、日本領事館・学校経営理事会へ許可願いを提出し、認可された後実施することになる。不測の事態に備えて、万全を期す上でも、領事館の果たす役割は大きいといえる。

エ 実地踏査

とにかく、児童の生命に危険が及ばないように、あらゆる場面を想定し旅程を検討する。2泊3日の強行日程で上海や蘇州の観光地を巡り、安全性・トイレの位置・写真撮影場所の決定・待機場所の決定・おみやげを買う場所と安全性の確認を行う。さらに児童のアレルギーに対応するため食事内容は一品一品調味料に至るまで確認し、必要があればアレルギー対策を講ずるよう依頼する。宿泊予定ホテルについては食事会場、部屋の備品、サービスなどを細かくチェックし、こちらからのリクエストを提示するなど、安全で他の宿泊客に迷惑をかけないようにするため細かな調整を依頼する。

また、イミグレーションを通過する際の必要書類・税関通過後の待機場所の確認・IDカードやパスポートの管理についての確認、空港での集合場所などを十分に検討し、旅行当日の引率者の役割分担を作成していく。在外の地での危機管理は国内よりもさらに緊張したものとなる。今回はSARSや同時多発テロの影響もあり、出入国の管理が厳しくなっていた。また、日中の外交上の理由による反日感情の高まりも懸念されるなど、これまでとは違う難しさを味わうことになった。さらに、悪天候により香港政庁が休校措置を発表した場合は、旅行そのものがキャンセルとなるなど、不測の事態に備え対策を講ずる必要がある。



<外灘からの様子>

オ 保護者説明会

夏休み明けの保護者説明会には大半の保護者が参集する。家族旅行では中国以外の

地域へ出かける家庭が大半を占め、中国国内旅行は修学旅行に任せるといった状況も見られる。教育熱心な保護者が多く、旅程への関心も高い。世界遺産を巡ることや上海博物館のような文化的な価値の高い施設の見学要求が根強い。

説明会当日は、旅行業者による説明と学校側からの実地踏査の報告が行われる。例年、保護者からの質問や要望も数多く出される会となっている。安全対策等万全を期しているが、全ての不安を払拭できるものではない。

カ 事前指導

事前指導では、「公共の場での行動」「空港での集合」「見学地について」「現地校との交流計画」「文化の違い」などを、具体的な状況を示しながら児童に指導する。

貸し切りバスによる移動と違い、国際色豊かな一般客が搭乗する航空機でのマナーについては十分に指導する。些細なもめ事が国際問題に発展する可能性もあるため、児童には「一人一人が親善大使」の意識を持たせることが重要である。

(2) 旅行の実際

① 空港にて

反日感情の高まりやテロの発生による旅行の中止なども心配されたが、何とか当日を迎えることができた。しかし、国際線の搭乗は出発2時間前。児童より1時間程度早くに空港で待機することになる。児童名簿を片手に全員が忘れ物なく到着するかを確認する。パスポートやIDカードを忘れると出発できないという事態になるため、真っ先に確認することになる。あわせて、健康状態の確認も行う。集合時刻が近づいても到着していない児童への連絡なども並行して行うことになる。

また、年齢や香港居住期間、パスポートの種類により出入港の手続きが違うため、グループ編成し到着した児童より、必要書類を回収し、航空券の搭乗手続きを進める。100名程度の団体ということもあり、手続きには相応の時間がかかり、待機する児童は公共の場での行動様式など社会性が問われることになり、担任間で連絡調整し児童を掌握する。

荷物検査やイミグレーションの通過は児童とはいえ、一人一人の責任で通過する。大半の児童は問題なく通過できるのだがX線検査の結果、筆箱にカッターナイフが入っている子がいるなど、小さなトラブルは数多く見られる。

搭乗中も公共の場でのマナーを実践する格好の場で、多くの児童は自覚をもって行動できていた。

② 見学地にて

上海市内までは「リニアモーターカー」を使っている移動となった。時速420キロを体感し、瞬く間に市内へ到着した。

東方明珠、上海博物館、虎丘、蘇州、上海雑伎団、現地校との交流などを3泊4日の日程で巡る見学学習は児童にとっては大きな刺激となる。香港とは全く



<朱家角の用水散策>

違う町並みや交通事情などを実際に目にした子どもたちは、ようやく外国にいることを実感する。香港では感じられない危険へのアンテナは自然と高くなるようである。

中国の底力を感じさせる世界遺産の数々、逞しく汗を流す人々、安い物価・・・、子どもたちの目は輝きを増す。おみやげな

どは定価の半額以下が相場であり、工夫して商談を成立させる微笑ましい姿も目にできる。



< 虎丘での記念撮影 >

③ ホテルにて

ホテルはツインルームを利用する。日本のような和室はなく、一般客と階を同じにすることもある。くつろぎを求めて滞在する諸外国の方々も多数いるため、飛行機以上に公共のマナーの実践力が求められる。

私は2度上海修学旅行を経験したが、いずれの場合も大きなトラブルはなく過ごすことができた。しかし、寝不足が原因と見られる体調不良を訴える児童は数名見られたことを考えると、4日間の旅程には無理も感じる。国内とは違い、夜の巡視はほとんどできないのが実情である。一般客が滞在する廊下を徘徊する方が迷惑だからである。

(3) 実践を終えて

修学旅行は本校の一大行事である。旅行の目的を果たすことはもちろん、3～5年程度の短い香港生活における大きな思い出となる3泊4日である。また、香港は日本以上に安全な地域となっており、自由に外出が可能なため、在外で生活していることを忘れさせるほどである。そのような児童に、この旅行は在外に暮らす上での必要な素養を身につける格好の機会となっているように感じる。そして、何より日頃交流できない現地校の児童生徒と交流できたことは有意義であった。旅行後もメール交換などを継続する児童も見られ、親善大使としての役割の一端を垣間見る姿といえる。



< 現地校児童との交流 >

また、我々引率教師にとっては、異文化理解・コミュニケーション能力の育成など国際理解教育の面、危機管理意識を実践を通して高揚させるという貴重な経験となった。

3 日常の実践から

(1) 英会話の重視

「現地理解教育に力を入れよう」という思いを胸に赴任したが、香港ではそのような時間は少なかった。それは総合的な学習の全てが「英会話」の時間となっていたからである。広東語より英語の習得を希望する保護者が多く、英会話は身につけなければならない言語という意識が強いためである。実生活でも英語で十分に生活できるのが香港であった。



<イマージョン作品>

英会話スタッフは全てがネイティブスピーカー。各学年を能力別・経験別に9グループのクラスに分け、きめ細かい指導が成されていた。児童にとっては会話を中心にした楽しい学習時間となっていた。

また、遠足やバーベキュー、トレイルなどの学校行事や英語カルタなどその他の教育活動にも英会話スタッフが参加してくれることが多数あり、日常的に英語を使う場が多数あったことは、本校の特色と言える。また、図工の指導を英語で行うイマージョン教育も取り入れられ、日本とはひと味違う作品も作られていた。

(2) 狭い香港だからこそ

香港の学校はグラウンドのない学校が多い。日本人学校も同様で児童の体力作りが大きな課題となっている。狭い体育館や屋上だけでは体育の学習すら満足にできない状況といえる。この問題の解決に役立っているのがプールである。日本人学校には温水プールがあり、年間を通して水泳学習を取り入れている。ライフセーバーと共に児童の水泳指導を行うこともあり、泳力だけは国内の学校に負けないように思う。

また、運動会もグラウンドがないため、スタジアムを借りて実施している。スタジアムは陸上競技とサッカー以外の目的での仕様を禁じている。そのため、日本でおなじみの綱引きや玉入れなどの競技は表向きは実施できない。それでも、種目名を変えて「騎馬戦」や玉入れ、表現活動を実施している。

現地での練習は2時間という限られた練習時間で、表現活動を仕上げるのは至難の業であるが、保護者の期待に応えるため児童と教職員が協力して取り組んで、趣向を凝らした演技を作り上げている。保護者だけでなく、日本から祖父母も応援に駆けつける一大行事といえる。

運動会当日はスタジアムを管理する担当者も招待される。いろいろ言いたいことはあるようですが、最終的には「日本の運動会はすばらしい」と絶賛してくれているそうです。それでも、目的以外の使用は認めないという姿勢は一貫して変わらないのが香港らしいところと言えそうです。

4 終わりに

平成15年4月5日に辞令を受け取るため、国内での全ての手続きを終え東京へ出発しようとしたその日に、文部科学省から「家族は自宅待機させ、本人のみ東京へ」という通知を受けた。「謎の肺炎が流行し、香港は大変な状況らしい」何が起きているのかよく分からないまま、私は東京へ出向いた。

辞令を受け取っても、本当に香港に赴任できるのかどうか不安さったことを覚えている。家族もこれからどうすればいいのか全く分からない状況が続いたようだ。

4月6日、我々は閑散とした香港行きロビーで出発を待ち、定刻通り香港へ向けて出発した。空席だらけのジャンボ旅客機、登場していたのは派遣教員だけではと思わせる状況に、ますます不安が募ったことを思い出す。

SARS からスタートした香港。子供のいない学校。いつ始まるか分からない新学期。子供の安否の確認、そして家族への無事の連絡など、これまで経験したことのない一種異様な雰囲気であったことを思い出す。

1か月後、家族の出国許可が出された。そして始業式、入学式が行われた。しかし、児童は100人足らずのスタートであった。その後、**SARS** 対策に神経をすり減らした毎日が続いた。

このほかにも、国内では考えられないようなことが数多くあった3年間だったが、周りには信頼できる頼もしい同僚や先輩がおり、そして限りない可能性をもつ児童に囲まれ充実した日々を過ごすことができた。

日本を離れて生活することで見えてきた日本の姿、そして、香港のすばらしさを存分に体感できたことに感謝しています。